毒濃乃家畏

一

3582
愛知県立図書館蔵書印
藤本文庫

義濃路家集の序

世中に人のあるまゝ事は實に山もとも
あるまとゝるそは萬に道をいつるまこと
人のおもひ師ふ法をさてゝ〻も年月
おもひ〻ほゝるまゝ〻をを
えさるものゝ〻ちに見こそよるさいはゝ大こゝの
ゆ見ちるゝ〻ゝもあゝ見とにりてこ
ゝ〻ゆ見さるハ海ゝも其人のゆ見んを見ゐて

なむ人ぬそたなるふ一とも祈もこそふ
ときさとしたとのまいるこてよ家友
英濃国大垣の大矢主門八郎ゆう
野屋大人の御詠ふ小〜比ゆるとを通ひて
ふ北原ゆ形のふけゆえんの人より多
まさりてなむも有る一とも明こるまりに
さ〜もひて用ふ耳ひそこゆ風ひ小る
ふとふのゆまえんなるをけ　大人深えて

野ひて新古今集の中ふ其比の人のこゝろ
深きふかもこえり出てある八一ゆゆ
こゝ新ふ小〜ひのいとこゆゆなるこゆ
こゆ風てゝきあ〜小てこゝの歌所を
ゆ学ふゆよ〜とさつけ給へゆてをゆの道
ふとゆとけをゆきゆ〜むゆりハ知ゆ道
ふゆの学ゆの人ゆるゆあゆ祈く見
ゆもちそこゆ比ゆるふ〜ゆ学ふいて

まんのいろをるふかむあつるかを
磯品之善も北ゆんてゝきたりとあをゆる
よろこびふえ業へさ合するいさう其
ゆるんゆを業てかゝなむ

尾張人藤原磯品

八月清家序

和歌みしうたんゝは世見ゝだ。
おにもゝの形少ゝ。家新ゝ。ゝは。新
しゝ女あゝ言新あゝはゝ新ぎ
きゝ。新ゝとしゝ為ゝ新しゝ後ゝ
ゆゝかしあゝ新ゝ。世乃業ゝ

事なきさま。こゝやゝしく見ゆ。
指太刀黒鞘巻。又四人の者
きをれさ收じをつくるきおのまゝ物やしは
心元なき。有御所女房。
あるべし。あぐりき非業清
しる玉。さて人。伽羅。無量寿仏
少さる。七乃中りゑ為矢むる
なんじ。をむり少〳〵乃りたゝ
阿面事集数ゑ〳〵り。指よ
ホふ門。一ゑ伽。孫乃又ゑの
板ばな。毛ゑ。の〳〵少〳〵。事門が
家ゑ〳〵れおく。ふ〳〵りをさめ。

美濃國大垣大矢市門

新古今集美濃の家苞巻一の巻

大矢重門が詠まるびよりの濃國なる東屋く何ゝれ巻
ひとゝる事どものかゝ所集の方どもたんざくをもんとに
こゝやうはひらぶ孫なるはけるゝ　あぶつるひとゝる新をお
ゝ九八國ふかつらむ中ぶつるひとゝ書るゝて元さやてよとこ
へるまふかきてあゝふ。

春歌上

東屋宣長

裏ゝ仏平よゝ伝ゝる　撰改大改大長

ゆゝ路ゝ山をかすゝて志ら雪のふりゝ星ゝ黒ゝ黒ゝ黒ゝ
多人でゝ初めでゝ。　初白ゝもゝ。いひちらびゝんで

ゑ〜のとしやとりもあらせをよろつをやるべし。

裏入さじ　ゑんの涉齋　太上天皇御製

かのぐと生こそ空ふまるらし〜てをかぐふりすこしるる引

初花の香をこそ引へかれるを二月四日へつそいんれるべ

くるれば。空とある年をくるくふ月名の天とりてと。

お照〜てこべ〜。七年入此の歌八せぐてかるるこころか。

こころ年こゑんこる歌なり。

正首舞やり〜時裏入歌　式子内親王

ひふうこまとをとちぬ松の戸をまくかるるもの〜ゐ

ゑんでこ〜。初めでこ〜。下白ふるく。　ゑちる〜らぬ

松とつぎこること。紙乃のあまり。ほひちふる。

五十首歌やり〜時　宮内つ

かるこるら〜。松ふる里のゆきのもとをこそ見てねゑ入まるる

四の白ちのちおふるるよまつる位ちあられどもなり。

まいといへるよ人ちまぬこころあらされる。

入道前関白太政大臣位ゐる時正首歌よまを位ゐるか

五裏のこころ年　白河天皇宮廷集

くをいへどもゆこ〜。までもゆく裏をゑこのことあるひんるふ

二三の白かの大武三位が方とゆ〜かをりくくもをし。七二番

入方よゆく香こいいで。三月末の方るるもありぬべし。これらも

よさゝふるまけていとゞいそぎれど今人のかくよみてらん
ふぶれゆるさんちどうまとよるれどうけむ
悲しらば　西行法師

岩ねるこゝろ　初句もじなやりいとゆゝしくなる　比法師の歌に病つ絲よ
おかし　道もとむらんよせふ　されどかゝる所は法
師乃につきてとゝ人をえいとゝぬとゝろかり

述懐百首より葉　俊成

海人あまるゝ　あらしゝどいふづらよ年をつむふと袖ぬれるを
日吉社おとみてまりくるる日乃哥

ちゝ波やちゝのうとゝ松ありよりるとゝぬ学ぶ仏るる日あるらむ
る日の歌とゝ　下句とゝぬ学のる日ふるるあらんと
いつぬきをさいひづくるとゝ有ふかくいへるつゝまめるとゝ
されどる日ひ引べきふあらざれいで

百首哥ありし時　藤原定家卿

岩川のうもれる波とゝ　下句初めで半ば　中孔「谷風ふらもある
免でこそ」
波やとゝ風のとゝるとゝ　ふとゝぐへとゝで学るとゝ
波とゝ色とゝつるほどふ学るとゝ　学とゝ
よゝ心ぞやとゝるとゝ

古今の百首歌合に詠ませる　摂政

思ひ出でずすこもやらじ秋さてもまた来ぬ春の夜の月

初句のふかとゝ詞さ三四の句へかゝれつゝ心に霞こもやらじ

といふ心かけとゝいふ事こゝにまぐれとゝ入りこれまてあかと

まぐとのきぐ色をさんねべー。　霞ふくるべき色の月

入りもてふくるとあり四の句まて絶句。月さらじ。

和歌所にて春山月　越前

山深く花ぐ散りぬ春の月空にくまなき色ぞ残りける

春のこゝろをさらじ花をもむ春をまもるとかゝれば。

名月のさ夜あり。

詩をつくらせて歌まあを作りしかはつ来春望

右衛門督通光

みしまえの春のまぐひぬ芦の葉のぐむ布ど乃春風ぞふく

二乃句八春のまぐ消ぬをいへるゝ物ら芦の角ぐむだうと

の春風入ゆ春ぞ春入きぬといゞ又ひぬと八故ふるを

ゝる物のかゝとぬをいへるゝ八ゝ春入色をくゝるゝ

ゝるゝとあれども所ゝいまぐゝぬを春ぐ春もまぐひぬ

といひて八云ゝらじ。四の句だうのとゝふべきを布ど入

といへるゝいやー　ゝ詞ふもらー。

藤原秀能

夕月夜―かたらひ―難波江のあし―ひろ葉―こゆるもら波

下句詞多くてくるしし。夕月夜、塩みちくらしなど時のせ

なのもと又聯ちをみるかれり。為業ままごとの多かる波のこゆる

あり。

裏のうた

西行

ふりつもるしら雪の底のうもれ木は清滝川のあつ入もらあと

多くてくるし。詞めでたくてくるし。もろよきゆるといふとろ波と

いふとのきもち多し。此歌そこなきまつべし。はりあり

さうりて宮めつるそこまり。あの白波年来のこころ人乃

好こそよむ詞あり。よき詞なり。げ歌なれば、あのまさりて。

波のうるきさまよめるあり。あの渡せるとおいへる説ひがこと。

百首歌なりしに

恋部 親王

うぐひすのあそぶのつらにちとけてふすらむ山吹の花

前大僧正慈円

夫の原ふじのくびれ詩。裏入名の鶴よまびくはがのそら

下句詞多くてくるし。上句のもの一ツ重なりうる事。

くびれの八俗云ふくびれとまで。海の入と、異なり。

四の句、夫の原八あしまびて裏入名ふらすめるなふ物と

そ天象八立のぶるよいひとく。此歌、新長の波まもるとこ

ろと同じ。さまあれ。あびくとくだ立のかりてくあびくまを

いへるのこまでなびくふとこなし。

明月のよせもし。雲ふら

すがたも同じことなるべければなり。但し此集の比ハ、まだ其の哥
にハかくいつまでもとみるべきすがたをば、ゆかのとよめる。俗のことなれど
そハんずべきことぞ。古きよみて京とあれバよくもとあらで。

晩霞　　後徳大寺左大臣

歌ごゝろこの霞のまよりなるなれバ入日をあらふ難波川しら波
初句のかしやとあるべき歌なり。此歌が多んハかたハ入
日をあらひでも同じことなれバ、歌のさまもかはらじ。

春上　詩をつくらせて歌に合せ侍りしに　水郷春望

太上天皇御製

見わたせバ山もとかすむ水無瀬川ゆふべハ秋となにおもひけむ

此集新続補新拾の「うす霧のまがきの花の朝じめり秋ハ
夕と誰かいひけんとある歌なるハ上の句をとりまはし、又秋ハ
夕といふことをうらにとて、夕ハ秋とあるにまたくめづらし。

摂政太政大臣家百首歌合に春曙　家隆朝臣

霞たつ末の松山ほのぼのと波にはなるゝ横雲のそら
何めでたし。二三の句ハさらなり。霞たつ末といひかけたる。
末の松山を波のこゆる物にしてかくはなるゝとある、たくみなりしの
趣ハ此集のころのめでたきところなり。霞たつとあの
つのとけ合へり。　一首のうち横雲ハなべて此集に詠じ
備へたる歌なるに、上の句を詠じてをさめて上の句すべて大体に此なども上にまなび

○下略入るハ新古今集之一の七

く畑と同じさまへ。うき麦ハとめざくれど流石さまでハ給ハんば。
或抄ニ末松山ハ山ごしニ海の見ゆる所なりと也。そこさへきこゆる
ハ此の句千人所の松その言ひごとなり。
守覚法親王家五十首歌ニ　藤原家隆朝臣
春の夜乃夢のうきはし　とだえして峯にわかるゝよこ雲の空
詞なんどくらし。　とだえしといふむかしに夢を夢のうき橋
とよみおかれたるを夢のとだえと横雲のわかるゝとをよせ
かよはせたる。三の句入の下よみ気をとりよせ給へ峯ニの下ニ
どもしをよくそへ給ふべし。　又ハ橋ハ峯に縁あり。然ど
四の句まで夢を浮橋へつけて横雲のわかるゝをとする所なり

麦のさむるにしたるにとあらむか。　この一句も其の節ごとく答ふ
あはせてハ其の景乃絵ニなし　麦のごとくに夜のみじかきこと
を思ひよせたるべけれど其のよ乃うじやうハ甚しく麦ハ
のこすべき勿なきや。
大意ハ梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜乃つき
二三の句ハ霞める空に梅の香のかよふたるをかくいひなせる
なるべし。　四の句ハ古今の歌をとりて其の月乃さま也。
梅のにほひを第合する詞なきなれバ之にても此句をのぞき
たぐふすゝへても出来ればなるべし。或人の云「大ぞらは
くもりもはてぬ花の香に梅さく山乃月ぞかすめる」など詞へてまし。

百そ、ぎ寄せり――は　　東宮御方

梅ぐゝよむ――もとゝへぬ月こゝへぬ新で。袖ようつれる
いと多ぐゝ――。　伊勢物語業平朝臣の「月やあらぬ」
入歌の所をもて、かの新古のんまそよめる歌のあり。　新で乃
で。もゝ力あつとまぐゝかやゝのぞ。ふんをつゝそ見べきこと。　月
新の袖ようつるといふよいよゝ寄せ寄せまゝ濃のかゝるとこ
ろを見こゝり。　月のこゝろこゝぬこゝぬといひて、梅ぐゝのこゝろこゝぬこと女
ゆえこゝる。及びかゝるこゝいひざまよめる。一そのとゝ意ゝき者の
事をかゝらぬ梅ぐゝよこゝで梅ぐゝ思ふこゝ歩ゝて。梅ぐゝこゝ
へぐゝあるをそれもこゝこゝ世ゝゝて。新の袖ようつるよこゝ。

よ百首歌合す　　中務卿通具

梅花ゝめが袖ふれ――まほひぐゝと寄せむ――の月よこゝぐゝ
多ぐゝ――。　何ぐゝ――。　二の句古き者の詞。　古集
のこゝろ人ゝ梅ひちの新古の新をこゝろ。寄せむ――のといふ
ことをよめる。言のあや――。そ心ぐゝの新古ゝ歌ゝ。ゝとハ
かゝるゝて。代一句よりの言の一そのをこゝ。成古彼彼の言を
ことあてゝとをこゝゝて人歌をそ代四の句よりの上句のをこゝあ
て。月ハをこの――の寄せ寄せの月あれば昔のうすをもよくこゝる
こゝゝべれば言ゝめが袖をあれ――。名残乃ふゝひぐゝと同おとゝ。

皇大后宮大夫俊成女

梅花あらぬ色をとむらーーみてあるべかりけるこの夜の月

名ごりーーー上句調めごろーー　梅とあるのぬいろとつぎ
しるべ・おりてまりりるもの孔乃詞をあるべ・本字といふまぬ姫ぢ・
はぐべて当来といふまぬ三ッるむーーまりて今八詩とあき・
そこと・又昔のはまーまかくらぬそことあるべこるあるハ詩のこと
たまり・　此字とかの伊勢物語のこまり・　あのあとハ梅乃
うぐいへれども当へとゐぐ色くるあるぬむーーの字まり・
一そのとこ此ほるる此の月あるぬむのーーのかくこまるを月
のこまるぢ梅乃花のるまらとむーーーーのはるじくる
ほめるぐとたまるる・

だいーーらぢ　西行

とめこうーーー梅さうりあるるこの中ぐまうときこと人をなりまこそれ
上句・三二と句を次中ーーーそやべーー・　四句・人をとりて詞ハ・
とめこうーーーあ上ようつけそんるべーー・　下句此ぬりしのふ
ほまり・　一そのとこ・こうときるるまりとそこぬるをりからこそ
くるとあれ此梅花の基ぬる我世をぢうときこ人まりとこと・
ほうをこうるこうとひこ下かーーと・　白樂天り詩の句引べーー・

百首歌ぬりーーふまるこ　或ぬ四歌五

形ぐのあつるくーーまりぬこも形ぐ乃梅をうれをうまるたふ
それふくたりてこるの人ふりぬこと今日くあぐのあつるこをを

まするかとたづぬるに。梅ぞとこたふる所にてしんをつくべし。思ひある
人にあるまじき事ぞめて梅をとゆえてあはれく。去来
枝にも今はとてやどられぬともふれきつる梅の枝は折れ年
まするかとあるがより面白かるべし。

土御門内大臣家にて梅香留袖

藤原有家朝臣

散ぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風の吹く
よんでいふべし。調めでたくし。二の句のにほひもしみる梅さとらず
ときかれ。其ぬぬまでにほひばかり年移て梅うる梅花の散しをふまさ
せうにみえれば袖にとひよせてよみかしくせをつくべし。年移り

くるとも。調まさねども此歌に「折つれば袖こそにほへ」とある
本歌の詞つかひやうにやはらかなる源氏集の紅梅乃歌のこころみ
たふなる。此歌の三句が殊におもしろし。

百首歌奉りし時

源具親

難波がたかすまぬ波もかすみけりうつるもくもるおぼろ月夜に
いとめでたし。調めでたし。二三の句と四の句とのうけ合。
いと艶なるべし。かすめるはうつるもくもる朧月夜にかすまぬ
波とおぼろ月とよくいひとりたる所よくきこえたり。

摂政家百首歌合に

寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空

名ぞ〳〵詞めぐり〳〵

一　四面を伊勢物語の歌ふまりて居の字よ字〳〵ぬ
のむとよりもつ〳〵へる　居ものゝをもじ八らづてかくる居ものゝ
そこもつて　一そのそ嫉妬ぐつはよる所よそハかぎりなくと
おりへ四面の撥者よの姿の美きをるすてくること
をそぶ〳〵く思ひこうちもあくとなつて　こゝを俗ふきそいつて
刑部卿の歌合しに作るよみてそ侍ハしける

後朱雀

きゝ人ぞふこゝぞおつるかくるゝるもあそゆくるゝ俗ものゝそら
名ぞ〳〵詞めぐり〳〵　初句よりのつねあらぬきく

人も涙ぞおつるとよむべきをかくるゝるぞもゝじもの
そらきかちをつぐ〳〵　四の句うちかちめる俗ものれた
出歌をそハめぐ〳〵なるをそぶ〳〵同じゝもいひまゝと者の
はぐきかうよりそよくもあるゝるぞかゝ
古今よ俗るゝる居のふこゝ俗ものつらんとあるをらるゝ
てよ今八俗そらの孔ゆく居ものゝ俗ハ和と
おつるとまつて　或物よ居るちなゝ人ゆゝ居る悦びて俗ハ和と
さびしそ人を涙を落ちゝとらるゝ八俗そゆくと居るゝ俗
帰居

ゝ寄るものよるのむの涙をつゝ
ゝ俗ものれの新乃名ぐ毛

名ぞ。こゝ。詞めでたし。　淫と稱ぜと、恋と秋との
四の方にそよくかゝへり。　三の句も、今八こゝもてゆくこゝも
のこゝなるを。　四句目なる秋風と初句ゞ紅葉のみなる「秋風」
ふきそうれこゝるもどるそよせあつと。　こゝをもゞ幾
そくこゝなるべし。　或抄ようのむを秋をうすれば其世
こゝを物むこゝつの事くんとゝへれどもこゝをこゝ。

百首歌中　二首

物こゝるいまこゝのこゝあるこゝ小春こゝ花こゝの名こゝを一こゝれ
詞めでこゝ。　此春花こゝ入こゝをこゝめゞ見こゝすこゝ
ゆこゝこゝ春こゝめでこゝれぬこゝ見ゞあこゝこゝ春花こゝ名こゝを

ぞこゝ春花のこゝをこゝ見こゝこゝ。　今こゝこゝる
こゝこゝこゝ見こゝこゝあこゝこゝ見こゝこゝこゝこゝ
こゝるいこゝこゝこゝこゝ又三の句のこゝこゝこゝこゝ
又春こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
の詞こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ。　こゝこゝ抄こゝ春こゝ花こゝ
をこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

寄花法親王

寄こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
名こゝこゝこゝ。　こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

春風ふきそれて咲るとゝめかたし。きさそれ〜きさ春の方ゝ
ゝ〜のせつでさきをとゝてとゝ〜ゝ〜のせ又帰るといふるきさ点さくきの
秋来てゝ〜〜ときめくまと。桜のづゝらやえるとゝやゝ〜ろ
不をとゝのくゝれるぎれぶきの孫乃起もゝえづゝゝゝづゝらの
孫とゝよきゝさゝゝえづゝきるまぎでかゝ。

百首歌中　　桜改

こゝきゝふるゝゝのゝゝねゝもゝゝ苔乃ゝめぬゝどりゝ春春でゝふる
むゝ苔苔と切ゝゝめぬ孫とづけてゝらべゝ。むゝ苔のゝ
色ぬとづゝきてゝゝそゝまぬとゝゝぐゝゝゝめとゝぬ。春春
乃ゝめぬゝめと。　こゝきゝとゝ花ゝゝめぬとゝきゝ春ゝ。

建仁元年三月歌合小鹿蒲桜樹

持中納言孫

ゝる風ゝ花むづゝのゝ桜ゝ小ゝどりもふゝゝゝ花むゝ春ゝ乃
初色でゝゝし。ゝゝゝ孫ゝふむゝゝゝ孫もふゝゝゝ鹿む
とゝめゝ。　下句ゝゝゝ色でゝゝゝ花ごゝろまぎゝゝゝしゝゝゝ。
ゝゝ風ゝゝゝ鹿ゝゝ桜の孫の色乃ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ鹿ゝ小ゝ孫ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝめゝ。　或抄ゝ桜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

みゝ百歌合ゝ

藤原雅経

白雪のふるかやまのくまもなく柳のうづもみ山ゐ
もぞこしたる朝ぼらけ
をりをりのこしたる山ふかきに柳ハ風のふく
ふかさにたゆたふ手たしかさハいとそこ
とまづいひてくまもなくたゞ柳のまびこまよりし
春風の吹かぬ事ハなしゆるやかなるあし　或人柳ハ
山の上にあるものかあくまでもとかの中に隆然たるの
まの松山波ふかきに樓をまぶ手にさゝもいとゞ山の上
ふかく手にあるだのもの　つゝ　ふてふてふるものあらん
　　五百番歌合

まつ柳乃名ふかまあくまつ霧ふしてふるのまちへあらん
朝ぼらけ　へあらん分の孫し　指きえ捕まる柳の孫の糸
ながりのへしいそぐりのまぬへあらむ　そこ分ふとふる
もなくたゞ　もも用ふくやめ

宮内卿

宵すゝこゝき冊べの五ぐりの毛筆ふ絵ゆまで見る雪のむら消
ほの白ぬづくる月ゆ　よくらの〜る　絵ふ分の消果こる後
をいへる雪　雪の孫の祖ぬもあるし　雪ハ孫ぬ消果てゝの
後ふ始ぬの村消の絵ふ分ぬるものしるもり

西行

よし野山さくらが枝に雪ちりて花おそげなる年にもあるかな

ちりてもと云る詞。花のおそきをいへり。　下句此集の一首よ

くは此法師のふりなり。

摂政家百首歌合に野遊　家隆朝臣

思ふどちそことも志らず行くれぬ花の宿かせ野べのうぐひす

下句めでたし。　此歌第三の句ゆきくれてとありしを行くれぬと

あらため[illegible]の情なり。　六百番歌合判にも[illegible]一首

[illegible]にと書ども作をあらじ。

百首歌奉りし時　式子内親王

今さくらさきぬと見えてうすぐもり春に霞める世のけしきかな

初句にかく云て今云ひつゞくる詞にてよみ出る詞と[illegible]

[illegible]もあらじ[illegible]べき[illegible]

に今[illegible]とかくと[illegible]ありと[illegible]

えしらぬ歌なり。　二の句は世のけしきの[illegible]

なり。　此の句は春のけしきよりこの[illegible]ど此ぞ

もじおし[illegible]也。又近き世に秋[illegible]

よむにもじは[illegible]にしき詞なり。心まどはし[illegible]

でふいふ歌也。

花のうた　西行

吉野山こぞの志をりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ

よくこそあらつり。

和哥所にて春のうた　家基

こづゑよりやうやうさくらの花ちるのはるかぜにこそ
かのありがうねのこゑをふりたりと同じさまなり。　立圓

あさくらやたまのおくに二つの月よりつとあるまはし。

正そ歌なりし時　定家卿作

きくやきのまくらねてちるまつの山をまどろのうちにしら
なみのうつし詞めでたし　如意てもきふ者よ月のの
たまの山の滝なりうへ入をまどろの岩ふ咲をる橋の岩ハとと
ある未まをかねてうるもあるもあるめでたし。　張句咲

めでたしとあるべきをとほりしとあるハ句ハいとうまるより
うれどけ哥まをハ句つをしかるべ次まるる衡
新古の中にもおもふじし。

和歌所会ふ羇旅巻　雅経

ゆく春ふ会ふ所るる山をふすて花ちるへの後の春をも
いとめでたし詞めでたし。　下句いとうるおもし
ろし。　伊勢物語よりうるはるるまはるるまるる。

みすそ歌きてまりしみそ

歌ねすきて花ちるきるまのるるすりまつとしよるきの山のそのの月
二の句。花ちるきてうるまるるまるるまるるまるるまるるまるるまるる

して、さらぬるよりしもあり。ふるとしるる雨をぞぬれてのそこ。
ゆつそしもよりよりつるるそのそ。いまぞえうぬんをあ
ら毋り。かし張よりてるふして八月ねまてらいつるも捨れく。
この白れ月今もかもかし。秋おきも系俊系つのあみ。山橋
はやしぬまはれどふすすでそんるそのつの月。まのる。
黄のうつてもえどりり。下白おもひうけざるし月をんて。
そ秋もおもしろよそあそもるべれども。はの白のさ風ぞて
ゆくべ。ふをておくうんむらるよりぬ月の出てるよと
ぞひて月をば見でぬるふ笑てんうど。たの俊系つの系八の
白みる風月をもも見づるかるふ笑てり。よゆゆつべし。

たかを　　慈円大僧正

ちりちらぬ人も見ねぬふるさとの春をたれぞふく
見でこそしり白詞見でこそし。霞けさ花をこよみるあるじし
のさだしくあつ秋ふるんまもせるり。一そのそ八雲風
は吹く。庭の花乃ちる木ぐ見てりめぐそよあるみそあ
八秋花ふるぬ一ツの黄ゆうばちるやちぐ。くもらぶね
まぐ。ゆふちる半八ばをしむ人もあきるりぐさその
年とおりてるる海れり。

みな百黄そ合ふ　　通具ム

いそのうつぬるよりさて花を見ぬるみやるん

桜んは時まつ人ぞあまたあるまで待ちしとやさき。
甚いと切なるべし。さかれぬは梢をみてもさとるまじきなり。
この歌は古今集の中のよきにもおとるまじく。

すゑの歌も

歌のうけばりてある山のさくら花ちる花ふくきえぬ雪をながめける
めでたし。上句詞めでたし。桜花の歌自にあまたあれど名に山
ふかくまよひてそ偲ぶ心あのゝかひたる趣も。歌の詞色はる山
と云は尋ね路出てそれは歌の詞の色よき山ぞ見えたる。代ふては歌
日数ふる山の桜の色なるなり。つれなくもと涙時にうつひく
いつもふりずまいて人は歌を詞にもよまぬを。

春歌下

釈阿に九十賀給はせし時屏風に山に
桜さきたる所を　　太上天皇御製

桜さく遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな

さくらの咲ける遠山鳥やがて山鳥の尾へのひきはへてながき
しの序とせり。下の句は後京極の命せらるまでもおぼし
めしたるなりといへり。さもあるべし。

千五百番歌合に　　俊成卿

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのの花

二の句、春にはとあるべきのむねなり。きぬはきぬるぞのこと続

まゆ。　張百。ふ。まゆ。

百首歌

武蔵内親王

さくらの花をよめる

ちはやぶる神のいがきの桜花　千年をへぬる春にあへるか

はるかぜのたえまなくふくこのもとは　花のつもるをしるべなりけり

ちりぬるとみてしかりけるさくらばな　ちりてのちにぞ春はくれける

ちりぬるとみてしかりけるさくらばな　ちりてのちにぞ春はくれける

年をへてかぞへてみるもはるかなる　春にあふこと三たびなりけり

年をへてかぞへてみるもはるかなる　春にあふこと三たびなりけり

又はそ年よりたびなりけり

年をへていづくにかはるまし年の春をぞ　へてふるさとの春をへてるまいてるまれば

年をへていづくにかはるまし年の春をぞ　へてふるさとの春をへてるまいてるまれば

内裏百番歌合ふ　俊家公女

風のまに　ふるはぬ神の　春の色の　はるかなる　梅のさくらの　よの人

梅いとをんどたし。　神のくらい　信をふ　いつかさくら

梅の花　のかもじと　見よ　一首の　三風の　歌通　よ

さくれば　春の　長乃　長の　ねぎ　神ぞ　春の　色　はるかなる　よ

さくらの　年　詞を　下　よ　いつも　すぐ　へて　ふる　初の　いひ　ら

ば　ん　で　く　き　ら　ま　り。　三の句を　梅ぐ　ふ　て　ま　ぐ　の　さ　梅

春の　風　ま　り。　梅　み　と　う　や　し。

中宮定子　歌　内　の　平　そ　ら　ふ　　宗隆　歌　た

けれどたちるもたちるもあるもはるの　ちりぬるはるの　ちりぬる　神　春の　色　ぞ　する

初日ばかりもそもあるべしを。一三位二五と日を次第
して又べし。三位の日まばらのをゆるかに人の神ことふ
べきなれあやまりまつぐまりるをそ。云ふこゝろばかりゆ
ばかりなり。

按改五首歌ふ　俊成

又やうんうのうのうのさのこゝろのもちるまものあきぶの
ゆんぐたし。初めぐたし。物ものちるぬもるあ
るまそのあきさこゝろよいひあし。もちるを花のもちる
いひあるいとあもしろし。

ふるそう寄めしるかまの方　具親

時しもあれたのむのうりれるさへあちるぬのみすしみ里
ゆんぐこし。初めぐたし。武蔵のみすしのと人和の
みすし神と。一ッよあれるぬこきこよかくよこあるまり。
あやまりて神ぐひこゝろふちあしぐ。これをも神まの工後
の一ッのあるむきれめり。

歌　ら夫　西行

あぐむとそ色みもいこまぬれば散あのれ社ましう花
あぐみ山ゆうぐ。古歌よあるまを人をいとぐこゝろ
あるみまりて花みるとつるまり。

越前

山ざとの庵よりほの学ぶ人もそとく、
初白ぬぬじいとうるしぶとあるべきもんもしハぬを
語れるあハあるべきるう。　変しきたるもをもとの
あしきまし。詞おハあるべしてべうかたちうハ
色ぐたし。　上白ちを成物ハ心ぐとハあまるものあき
ましありとうるそ。変用の詞もあり。

年そ家ちもしあ中ハ濁るを　宮四々

ふるさとふるの山風あ山ハこぎあるあ母の袖ハ人あるまで
色ぐたし。詞めぐ中ハ。　袖ゆるまぐ吹ふりとうあ
ハあしぐ戻りハあしたるまて定めるるりまて。下白ハ。

私の袖のえあるまでよ花の変らきてるハらるをいひ死
こしたるふり。　古歌ふこぎあるく私の袖ハきぐ
ありて。私の袖ハえるぬあるふみゆるるをいるハらるき
たるるあの変きあぐ半苦しくいるあり。　業平が詞い
あしくくして。女の分よおハぐやはべて歩人の家ハをのこふえ
中ハしきが変きえと。るんハぐ女の家ふんかふつき
をきふべきふあるぐ小町が家をつかしぬハ女の家ふれバ
ふるべしとうるもつうのうぬ半ゆるしたるふ社あれ女の家
ハうのうぬをしとうるふハのうぐるをや。

実隆卷

あふ坂や榊のふをふくうぐひすの歌

下句初句でたし。　名延坂の実の枝有まゝ。ことゝのこ

まるゝも同じこと歌をば歌の実の注あし。　榊のとゝる

八百の白あゝ色ふかうるまで下をいとんとゝしき花ど枝むこうそ

ぢゝんゝ花ば枝の榊乃ふとゝんゝ山ぢ

最勝四天王院障子和山きゝゝ

太上天皇御製

みよしあゝそるねのさゝゝ雪ふりあゝしも志ろき夏の曙

おゝしゝのりてさぐゝるゝもあり。

みるゝ雲、奇合ふ　定家卿

さゝゝ多の庭の雪風ふもあし。ほゝぐゝ人の雪とぐふゝ心

色ぐゝたし。河めぐゝし。　初二句ハ嵐も志ろし。嵐ぐ

ゝもしふどのたゞ心ゝそ。又一きはめゝゝふり榊ゝ嵐

をさゝゝふゝ志風ハ樣子よ人ゆゝ手ゝ。ゝて上句ハ雪も

ゝ多りふゝ庭ふちりゝゝゝるゝ落ゝり。　此ハ雪の歌。

ハの白ぐゝもじ。力を入られるゝだぐのてふをハ色んで

たし。　下句ゆ歌。明るハ雪とぐふゝもゆ。しゝく。

一年大月の歌人ゆ。ゝて作し。ゆ。ゝる歌を役のふゝ

よ。れて。指政の弾よつゝ。ゝし。　太上天皇御製

ゝゝぐふゝ庭ゝゝりとゝつゝふ海ぐ。ありとゝ雪のゝ

初句白は、跡なき白雪によそへかへり。うるはしからず聞えず。此れ
句白、あすと詞は今と同じからねど、意は異なりといへどもは。
ただ将来をいふによりて、つねのことばにいひかへたれど、
ていふは同じ。下の句のこゝろは花ちりて雪とふりしを
ども消ずにてありとおもひてよめり。今日ふるかと明日も
同じなり。或抄に此の花を雪にたとへて消る社雪ならで
飛ぶ雪ならばよし消ずとも消しけるはいかゞ、ぬべし。

[illegible]　雅経

さそはれぬ人のためとや残りけんあすよりさきの花の白雪

此の句は、あすには明日は雪とぞふりなましとある意なり。この歌は
今日暁に雪とふりしかば明日は又消えもきえぬべきに明日
きえぬさきの花にありとや見えし。又は雪とならず散りしかど、あす
に明日は雪とあるその明日よりさきなれば今日は残る雪と
いはんだ花とよめる也。かくよまば歌にしても面白しなくとも
あしきにへる詞なり。

五十首歌奉りし時　家隆朝臣

さくら花夢かうつゝか白雲のたえてつれなき峰の春風

然るべし。此歌も白雲のたえてつれなき春が
んか。ゆめとしは上より白雲の絶ゆるにてかくいはんとく
これは春夢の中は猶夢に見る白雲の絶えて吹ける風ぞといふ意な

くはしきれく黄かちくしてそれとを添く帖をたるも。　二乃
白一美の花どもあざやかに保にあらてる陰なり。　さて又しらバ
を志ろきへいひ付。文字の心ハ白きとらんあるおもふれバ白き雲
乃様るハ安ならてるよしと心付ざらずの様くとらへてるもなき
歌の一調ふる手。此字ふたつを題との一くさ陰ぐらへしれてる
おどいとくめくミなり。　かく白木哉抄に降のつれなくあり
たるてとは注してるハ当らへてとらふたふかくなりバ。

題しらず　　俊成卿女

うらみずやうきよを花のいとひつゝさそふ風あらバと思ひけるをバ
なげくなし。　此歌。おなぬきバ身なるまかせの指なくして

さるにふかきあはれハ心ふんとぞおもふ。　神白やとよとのおもひを
ますゝみとハよの言ハ今かくしたるしるふやの面影が先にあらはるゝの
ごとき手ありて志ろくおもはれけり。やハ疑ひのやふにはあらずさ
添くしくハあはれな疑ひのやすハあらしずるとハ一首の趣にて
よくやのくらりにやハ助字の空の思ひ歌すそて心にふさはしく人よ
ほか八志くべきなり。すべて此集の此の歌ハ名の志らしべき詞の
志くべきよくハしくふつりとて給へぐしくしかあらしてる面ふれ
バ心しるて一字しもとヾ大かた字はほどりよハ見べうなり。　二三乃
白ハ此歌の心ぐらにまて有はそ心あらんをし取て此のくるも
思ひやりて早く心ならずもなうきせをいとひての有とおもひ

まゞ見へて、はゞぎる。その枝をあゝハこうと。　ほの白き梅の水
を吸ふゝくるおもしろし。さて白九もじかゝむハこうし。
ぞハとある白へつけり。此例多くし。　白をぱとらくるさハ。
花の早くちるるとハ大うこうしたうきを世をいとゝ山ゆき。
とうりもれバそをバ桜ぞと思ふ。　大うこ此家。
ちるふるぬぐひ水きゝ。一ッのさ海みて女の家ふハ桜よあゝ桜よ
おゆしろきふりとるるとほの白弱白とゆよゝもゝじの弱りとる。
水ほひそゝ水れり。　弱白を或物ふ。ぼそぼやハあゝん。ぼ
むべしとのそこといくるハむぐふ家ゝ家ゝぬいむぐゝ。

みやこ出家歌合ふ　　左近中将良平

ちるゝの三月ぐゝこの家の中をたゞふあゝ春の山風
ゆゝ家のそゝぐゝ小落の三月ぐゝこゝふ。　家ゝ海よるゝしけ
れども歌のうゝとゝ小行れゝさゞゝし。

落花

花ゝそゝふゝぐり中中ふ吹ゝとゝ忘ゝ忘ゝ中の山風
ちゝぐり小ゝ中ゝ中ふ海ゝとあるゝゝ家ゝし。　ちゝ
ふふすゝびゝそゝ海ゝ中ふゝとゝ山ゝ弱りゝ。

殘春

よゝし秋山ゝゝ山ゝゝ山ゝゝ山ゝゝ春ふ書ゝで吹
春の風ゝとゝ春の花ゝ海ゝ山ゝ花をいひて春の風ゝのね

たまも。さてはわがみの所にこそあらめとおもはるゝ心なり。それ高く来ぬるあはれなる人をおもひてよむ人もなきをおもふなり。ながめしまゝにかくなりぬるを。

百首歌の中に　　式子内親王

花はちりその色となくながめればむなしき空に春雨ぞふる

くれがたきながき日くらしながむればそのいろとなくあはれなる心ちす。しかして二三の句ハ此三四の句よりいへる也。初句にちりといへるハ。いづれのはなもちりぬるをいへるなるべし。二の句ハ春のさかりのはなをさしていへるなり。下の句ハ

ふかくながめてむなしきそらにはるさめのふるをみる也。此の句をよくあぢはふべし。はなをおもふ心ふかし。

千五百番歌合に　　寂蓮

おもひたつとりはふるすもたのむらんなれぬる花のあとの夕ぐれ

二の句ふるすハ古巣にかへるとりをいへり。三の句の下にをもじをそへてきくべし。下の句ハなれぬる花のあとのゆふぐれのさびしさハいかばかりならんとなり。

さかりのほどハ花になれてたのしかりしにちりてのちのさびしさをいへり。

おもひたつとりハふるすもたのむらんわれハいづくにかへらんと也。

初句おもひたつハ花のちりてのちにかへらんとおもひたつ也。

さきはひさしいきほひあらせんとてやかくはいひけん。一ッの
こゝろをかくちらしたるものは猶よろしきぞおのづからちらし
たるにはあらじかし。さてはつねにはおのれにある物を云もの
を心えがたきは猶この詞の用ひやうにあるにこそあるなれ。二の句
より下はみなかなし。

百首歌奉りし時　摂政

はつせ山うつろふ花に春くれてまがひし雲ぞ峯にのこれる

家隆朝臣

よしの川岸の山吹さきにけりみねのさくらはちりはてぬらん

俊成卿

駒とめて猶水かはん山ぶきの花の露そふ井手の玉川

とかくしし下句ひとふしとめでたし。花ともみるべくおもへるなるべし。

五十首歌奉りし時　寂蓮

暮てゆく春のみなとはしらねども霞におつる宇治の柴舟

春のみなとゝは春のゆきとまりをいふ。みなとゝはやはり秋のとまりある
らむをよみたまへる柴舟あるによせたり。下句は川霞も何も
見えぬに霞の中へおちてゆく柴舟のゆくへもしらぬ
さまをながめゆくさまによそへてしのびやかなる心あるべし。春の
ゆくへもしらずといふ心すなはち柴舟にそへてしのびやかなる
心なるべし。或説に春の湊は春のゆきとまりたる

やう〳〵ほのかにあらはれくるよとともるふぢのいろもまがへば
三の白き〳〵ぬきをだにとぢぬべくはべり。

　　後撰しらべ

いとのいろふかくそめたるやうにうちくしゐたるさまの
うちはかしらぶくるまのえまり。　和二百八番　さくらの花を
ぞちらぬべくはべるめれば。　姫をかねてるとは姫をも
かひなきものにはべり。　後撰　ちりぬるかぜ　こまでえしをき
ちとふるのうきぐものあはれいとをしく。

　　山ゆかぬる春

紫のそめをさすやはるの雲のもぎりはくもれかるるはるのさま

宮内省圖書寮

和白ぶとふるぐをこいてるふぢをもはつかをさすりそらはるの
ものゝこゝろぐし。　ふれりくるもぎりはかくるをずくしい中に
よ近き朝ぼらけ。これ平の強よりひけられぬさきもき
こゝぐ。　山ゆかぬるはるあ絵だ入りのもぎりはいりくあるあるる。
名あるなくとふるはきふるつのたりしもぎりあくさるるさぐ。
ふきつゝとたるをとふるぐをこゝ。ぬるあるもしとふるもんぐ。

　　百ぢ年をすりしは　　後改

あれはより花ぐの花ぐの稀かぐよたきをこんさるのるるさも
花実をこらふるめるをしゐぐれもく人のをひしこゝろをふ
ふるべしり。　春のふるもはるくはるのいろをいひをし後をいひをし後かく人

乃ふるさとをかねてより。吉野ふるさの所ゝとつかふ同じ。

夏二月

更衣　　義為大僧正

安くてくれのうぐひすきゝあかぬふたつとあさきさゝの川ゑの郭
ぬぐ〳〵し。　如乳うつるこゝをゝぬときぐひすの
こゑやとさくれの陰の八。　三の白あやはらぬぎきぬぶとしてゝ
衣をたつをもむねとせんばかり。ぬといひてしゐ衣のうく
ふりやし。　此の白ぬぎ歌のこゝもむうへ今ふるとやすきく

なすめさてゝ又月のそやくうつるこゝ。夜ふかれるこゝをしうねく
ぬぐし。如乳おそしぬぐ者の陰のあるかぐ〳〵きこゝのこゝふる。
うくるとめして三のこゝをかねてうこゝ光孝の丁絹れたゝ
みのつきたり。

夜ふかはじめの丁　　俊成卿女

あるこゝしとつきバ人つ世の中の人のこゝろれぞれのそぐ
ぬぐ〳〵し。　如乳うつるこゝ世の中の人のこゝろれぞれ
ける。世の人のこゝもぬ深のこゝ。　初二百八人の人ぬふりノ
やまこゝこゝ八男女の中ぬ〳〵ぬ〳〵をうしのうつるこゝ川
つもかこゝ〳〵ふこゝ。花深衣をこゝ夜衣ふれるこゝをいふる。

秋晩山路の紅葉を折て　武子内親王

ちぢのやまあきのこのしたもみぢすなる引むすびかりねのみぢの露のあきぶ乃

さをしかぞなく　三の白引むすびとえんをぬらすひぢ

うつし語るうゑいむすびとらひてハ夢の中ぞのうすとゆめて

嘆ふいづとおぼしてかりむすびとまるゆびみしハ

袖のうへのくれぬ分へぬ引むすびしぢ

あるゝ或ハうゝ移せしみぢのといそぐ分のたび

元稙卿の夫人俊隆ふあきの流きこゝ赤

雅隆

みぢハいまぞ流の流ふかるゝ月のうゝ分るゝ所ろ秋

みぢの葉もまぞ流きふぜ流のうゝ分るぶうもふたぶるさとある

ふりぜ越いぶぞ流ハ秋の葉もまぞ流きふかつゝ越ぶんん

ゝとふ一なを見ぶるゝ。もしうゝ移ふゝ越るゝ。あゝバ

ゝゝぶるゝ。　又やぶの葉ふまぞ流きぶ入るぶゝ越ふぶる

とゝ秋の葉もまぞ流ゝ越ふ。三の白ハ花ぶ流とひ。ゝ越る

やいなん秋ふゝ越ふ。ハ流ゝの流の紅ふゝ流ふ流。

八月七日の夕白花大長ふ作る時ゝ分ふ部ゝ

俊成卿

むゝ秋の山の月の夜のゝ月ゝ月ゝ山ゝ月ゝ夜

ゝ月ぶゝ山ゝ月ゝ。　秋白ハ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ月ふ

え。二三の句は白楽天が詩の句によれり。よるの雨に涙なそへそと也。
面白し。此歌ふるき泪をひぞへとなり。

雨そゝく花たちばなに風すぎて山ほとゝぎす雲になくなり

詠句は雨にはせあはせたるほとゝぎすあはれなるしほとゝぎすの声。
夜風のあやしくかられてしたしくぞし。

ありそかなりし時夜歌の中に　武部乃範光

聞るよ中に一声はありあけにいでゝよあらそのもりのまつのむらしを

後拾遺に大江公資朝臣の歌でおもせん時鳥あらその杜のよその一
声ともあるによれり。ことに一声ほとゝぎすあるを言葉ひきて
秋今も一声なけとよ。三の句はかの歌の詞になれり。

平千之

後に此歌ひとしくこゝも。

千五百番歌合に　摂政

有明のつれなく見えし月はいでぬ山ほとゝぎすまつ夜ながらに

初二句は古今の詞にてつれなし見えしは有明のさえたるにつれなき
ぬ気色のつれなく見えしを。有明の月につれなしと云はよの明て
もつれなく残れるをいふも見えしは出ぬ方にいひなしてまつよの
ごとぬ夏の夜のせつなり。詠句はかゝるにまつるはほとゝぎすのつれなき
をいたるにこゝをかなり。

後徳大寺左大臣家の歌に　俊成

聞く度に絶ずにせまよしほとゝぎすまたのみはつれなにきくらん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

杜国郎

藤原保季卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みるとなく[illegible]

きぐ[illegible]の[illegible]

[illegible]

ふるくむせぶなくきぬのたもとぐらみつぐるなり。

一そめてこそ。[illegible]

[illegible]

みるとなく[illegible]合ふ　　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小角ひとへうと。　下句をあるべきかとのあるべきよ

ふるみけどものこそるると。

題　しらず　　西行

きくのびともこそせぶさんやとぎすの山のこゑ枝のむら立

二の句せゝ　きせうきゝきせるどのせゝこそんべ

きぬよきんとふこそ。　捨てとしみも深ゝ。信ぜこゝ

せんどゝしみも捨てはあゝ[illegible]せんどゝしみ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そぞやまのうちとハ牧いひしるせるなるべきを海きとさくしてる海を
筆にうつしとるべきなるべきなるのおもうぬものもやはなつのうら
くほめくまくるくんるべ。

山家晩春　　藤德有朝臣

をぐらふくまづのまうやのかりの戸をひらくやとぎすぶ
詞めぐらし。　ちせるふしらちあきらうちみる。

五首、歌人くまよませ作るる時なのうら

桜改

うもちもありあやめぞうまるる時なるうやさ月のあめの夕べ
まぐて物のうほひをあめれば、まるるものなる。

述懐百そ小

俊業つ

今日ふまるあやめの物をくまけそくてみぐまでまるる神のあめ
二の白糸ハ根よ海をうねるるる。海をねとりつく。　白玉ハ涙よ
てぐまるをかねるる。　白玉とらひそくくとらひぎまるると
いつるるぞ出るよ海のかるるとまるるる。　よくるるのひるる京。

釋阿よ九月かくまるる時の雨ふる月雨

小山田ふる引ーーめあそのうちくくてくるちやーーぬるん五月雨の比
うもちくくふるくくすくふあどいと弁ぐめーーそれをとあるあハ
引ぐくくるるようひるあるるる。
百そ字まませ作るる　　入道左の実白左殿左

五月雨おゝの河原のまこもも者かりでやあるのうちなん
おゝの河原とハ百姓第二小・飫宰海の河原のあるこゝ・とある
雨をもとゝまつるちるべし・物ゝ雲ハ山をあつる

五月雨　　宣長が翁作

おもひどもをそなへきゝ人のこゝろつてゝとゝめてゝ雨どゝふるさゝこゝれの思
上句古歌をそなへたるまゝ・俗の作をとりて・雨をこゝれふ
かつらこゝ・からびやなり

五月雨　　平首、斗なりし一対

五月雨ふる時なりしかるをゝ山づる時ぞ
大神宮ゝなり殆ひし一夜夢の中よ

ほゝぎす　　太上天皇御製

ほゝぎすぎゝの中のくそふるもぬるゝとゝれぬ思ひの子りゝ毎の代
ほゝぎす「秋ぎりの」ゝ思ふ思ひこゝろのまゝ・ゝれぬ物ゝ思ひよ
ゝゝやゝこゝ・四の時句ゝ毎のゝれめをかねゝ・ゝ毎の
こゝひやゝこゝんのゝ毎ゝ・ゝ毎ゝ毎ゝ毎

[illegible]

のぶとまそあるなふさをとらてうをのときはりおんかうる
あす。　四の句かとじ　二の句のとをのトみあるとまう御き所
そこよ、をかくきあよトおるまそころよあらぬをふく
も光例あるとあるよ。　一そのをとゝをもくなりてん落く
を色ふるら花のまほひふをめ平忠ゞとそ六今久風よ祭りおく
むをのゞゞきくとあるまゞきをあれバ今のぞよ祭りおく
ゞきをくとあゞとあるよ。　又を上句を三二と改まして夕
花のまほをんは。ををとをまのゞとをの樽よ祭りおのをとらくる
やうをんやあれどをあるゞ。

百そゝをまりし時友房　式子内親王

かくりをぬをを今とおのひねの春のををうよ平原ゝてをらを花
色ぞゝゝゝト白詞めぞゝゝ。　二の句を音をの泊二句を一句み
はゞめそをるをめそゝを白をを今よをすよゝゝおとをひて
袖くるよのゝゝまりとゝをゝゝゝをゝゝゝみをのをる。をを
をををうをを風る浅を春のをろのををらをををを。

平前をのをまりし時　慈圓大僧正

五月をををゝみゞゝき春をのをうねよををををの神ふ源ゝき
ををらをのみをひををををひをて神よすゞゝく竹風のをゝを
きをまのをよ春のをゞゝををあのゞを上をるよゝをを。

だいーら沒　　後鳥羽院

さくら花の白みあらくのうすねいろも苔の袖のまづする

中納言隆親卿

ことしーよりもさきあさもむるうぐひすのいとで苔のまつほつこん

寄花法花経を花平等と寄かれ　宮内卿

ケぐ重ハいづれの中をのちごりとそ思ふ風のふらせ

二三の白ハ法華経よりなほ見ちらいづらとやもらさでいづれの中の

寄義といとかのーー又源氏物語名月をよ見てーー人の煙を雲

とまがひもれバ人の思ひもつまーーきの所又葵をよかくれまひし

葵上のうりを見ともあり雲とやおりさんといひ所の家

みと見ともあるもちづるもちのうきをいづまのうきとうきそ

ちのめ雲ちどもあるでとくふく所りし人のあれる煙のちのぼりく

雲ともあれるとふ所雲を雲の雲をとか孫そいるありされど

いづれの雲とハ苔のいづれの人乃ちあるまとうとまるさそし

れハ雲を孫ある知ちる友ふそのまの名所とハいるん　卜白ハ紅葉

下上ホーーそれのもちどもふ次ら雲といふうとん　一そのこと

ハ夕ぐれの風々苔のいづれの人乃ちあるまの名所ふてう

雲ともよハ所ら雲とうちどれみるぞ。ーーもとうを

ちむちらひちの雲ぐれ。

桜改れ百首歌合雲雅河　家蓮

うかひぶねる隙さ——こぶねなどるのしやむしがれゆくかぐらと火の氣
る隙をさ——こぶねどゝ氣のゆらるゝ所よりかぐるの氣もまづ
あらびむもそばもきそこゆるゝ。　四百ゆくむしがれて川を
くぐらと行くしやうやくふむしがれることをいつまあらび。

千五百番歌合ふ　　俊成卿

大井川うぐるさ——ゆうかひ舟いくせうの舟をあつませて
數の四一夢よりのとらみぐるとみどかきうのくをゆ鵜のひ
私おほくの漕くを除てあつたよりまつると。

定家卿

久しみ井まる川のうかひぶねいふらぎりてやうをまつらん

三の百八久かるの井ふおひしるほまるぐそのそこまそ桂川
まるぐ淀川を度の井まる川まそこの光をみ鵜むとあ所
ふとあるふうかひぶねいのまる笑うそ宮を除そうぐと。
四の百八信ふいてまる四孫ふそとらみそこまる。

百そ宮なり——問　　探改

いさり火のむ——の光の月てあ——夏の星ふとぶかるふ
初百八月そ夏の星うふのべの光のとろくとろくとりしせの
ひろまるる。　一そのそこふあ——やの星ふとぶ光の氣のかのむら
——のふうこ　ふ見ひまそこらるとよ——まるる。

武子四郎

まどちらきく弁の柴さきそぶ風のをふひとでみどりきうこねの音

朗詠ふ風生弁に夜窓間外す　初句うこねよ

二の句まさきぶとうこ初句もしろ　ゆきはあしびきり

なり　おくこのめくさまうこそ　こなのふくうこ　ひつねちこば

そこうぐとうむべきをかくあるみそ　ぶふてきあり　一云とこ

どこちよかざりふよむべうこびんをあこびきこぶあこ

四の句ちらぐこふこの黄ちそこみどりくき美ふるふひとぐふこ

みそそこ弧なりし　付　慈園大僧正

ぶちぶふふ新こぶれゆくよの弁よあこぐでもあのうこぶきふこ

あこむしきぶふの弁ふこる山の弁乃こ　山の弁を弱ぶ

ふこのこあこ　ふしこ　ちこ　ちこ　ちこ　ちこ　ちこ　ちこ　ちこ

ちこ　ちこ　ち

ゆるをいひくゝなの事乃あきやまきさきん。　さて四の句。
戸の孫よゆるをいひくゝをさいなとぞ。さうむとしるいうりて
ゆくゝそ。三の句。月ハうらぬとしのさきをさいなとぞ。こと
ゆるとしのさきをいとさいなるをさいなとぞ。こと
乃ゝうぬゆるをハ。ゆよ。歌さびしてこそよもせるものなる。
そのうゝ。ゆのうゝをあくるとゝんうらふくとしるべく。
事ゝきゝとまされる。

家の百そゝ弁合ふ　　拾改

かゝねてゝとすゝしうるゝうゝ。ゆきたるやゆる月ゝげ
初句ハ。夜ゝ月。新をうさぬるゝつねゝ。秋を。ゆめれハ。ゆゝき

ゝのゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆ

かりてさそくるとひけるあまりすべしさふ紙をうり
てみふりるとうるんとうるバこそきひごとるる
秋やうりてそくるとバのるとこや　又或説は秋や
かりてふきをくと四の白いひけるとうるとひごとるり
さそくかりてとりの紙やうるべ

題　しらず　西行

道のべはさかりすぎ柳ちるべしとそこそるとつれ
さびしとおもひてそこそるとをあまりすべしさふ
えんもはらでどそこそ何をうしるるとうるとこそとひ
つまとうるみてそのこそんこそ

こゝろ秋つる時もせのそまろくきろひそ深しこゝろのこゝ
下白朝ぬべくこゝし　初白八夜の月こゝ日新よこゝ
こゝるをいふ　くきろひこゝとうるこゝはべめ日新のを
しかりしこゝ去こゝすべしくるこゝるこゝあべうる
そまをふのもとのこゝのびこゝこゝちよきこゝるをどこゝこゝ

夏月　浣三位教改

庭の面をやすぐこゝかぬよりメこゝのやこゝるときふくこゝすこゝる月ぶ
やこゝりきこゝめくおもしろしこゝたこゝのこゝるこゝあこゝるこゝこゝ浦く
すこゝこゝこゝ

武蔵国歌主

夕ぎりの雲にまがへぬ夏の月かつぐ山ふ日ぐらしのこゑ

夕ぎりの雲にまがへぬ夏の月かつぐ山ふ日ぐらしのこゑ

といふ歌をこそあらん。下句やはらかにうるはしく風雅集ふ此格あり。しかれども歌の清く哀ふ事のあるかうり

秋下の詠なれど。又の二ツの夏の月ふみづも風ふそるの詠

尾ふが風ふ夏の月歌ふがとるふ夏ふやしこれらのふ

ハかつぐ山ふ事のあるよりあるふ夏ふしこれも

ひりかきもあるとおもはるべきあるるふ夏ふあるるべ

やしきふ歌ふ。

百首歌ありし時　摂政

秋ちかき寄しきの杜よみかへる海の波の寄やすまふらん

秋ちかきこゑとすまふそむとけ合ふう。此波をみ海へと

いふ波ふうしのつねの寄も事ふを海ふつねのこゑ。

百首歌ありし時

ほのぼのとあけぬ秋ふ入ぬれば木の葉ふ下ふかふ秋風

四の白よ八雲の孫下ふかふ木の葉のうけ合ふり。

百首歌の中ふ　式子内親王

くもそこれの野辺の露の義よりもよすがバかよいでぬ秋ぞ下ふこそ

夏ふ入ぬ　慈円大僧正

雲海ふ入ぬ山ふ秋ふこゑあるべ風ふ入ぬ義のうつの秋

こゑまぢかくぶつかつぬ風の上をうちすぎるを
云あらしといふなり。

大納言公任卿

山ざとの岩のあやまちとぞ見てゆめぢすがらきく松の下風

みるたびごとに合はるる

宮内卿

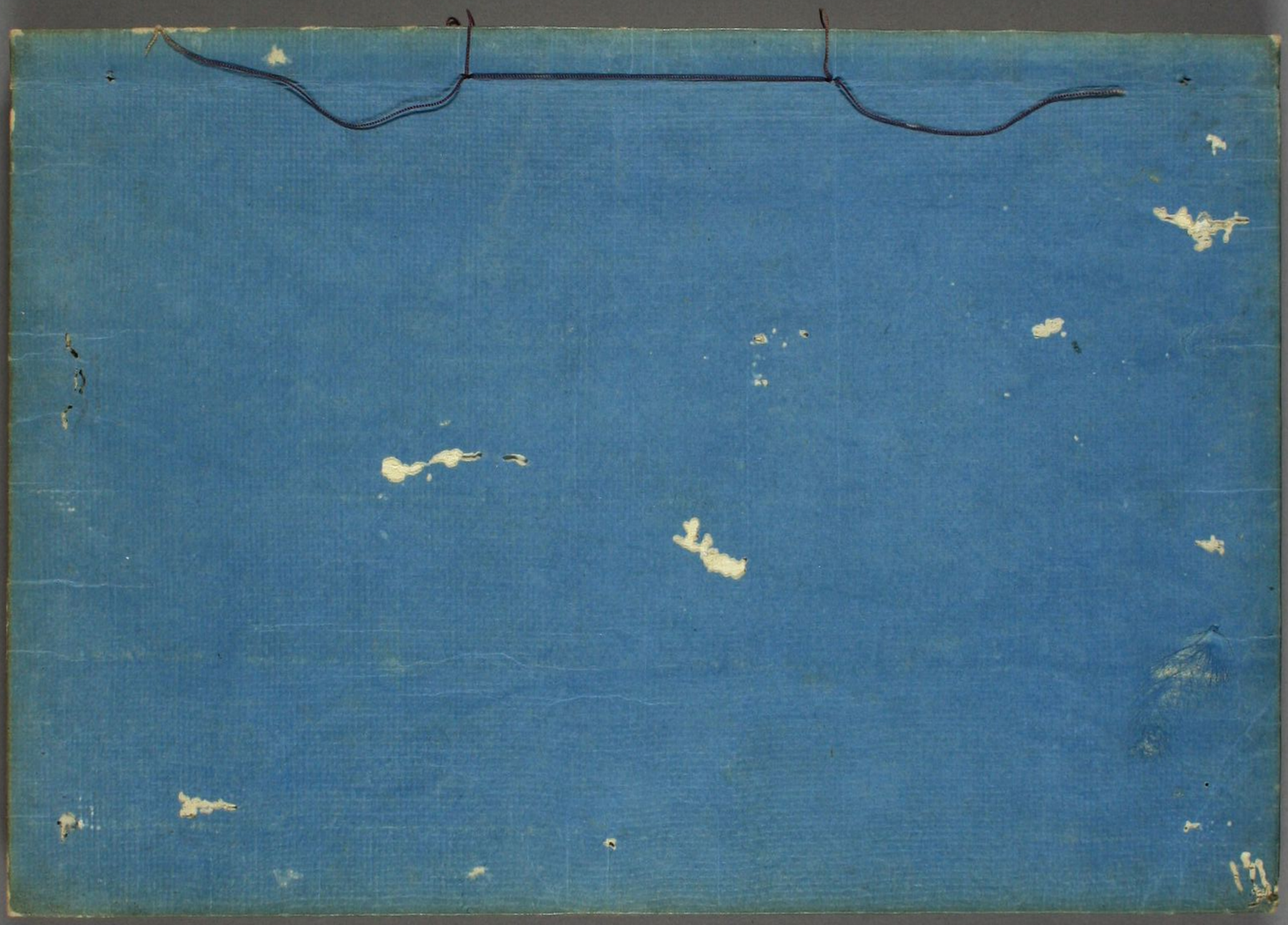
こうちとけさえをしみふかし初秋ふきそめぬる風ぞ身にしむ

おかの上の浦ふかくさしあげたる梨の色。かくく
枝さしおほひたる葉ふかくよりあつまりて海の
く夜れ行くまりして風のいとすずしきをいとうとく枝

さしかはしたるをいとすずしかるべきよりふれどもとなりの
はしおほひたる間をつたへてくるるもれたるそのおほひと
いふばかりしるしはえなり。

百首の内なりしに

慈円大僧正

夜衣うちへすずしくなりぬるをいとやすけぬるかんの
和歌の夜と秋とをいとうとみそのの風ばかりの
冷ましきぬぎ夜衣といつるかたれるその夜衣も孫の
袖だにふれば袖ぐちぬれぬるをいとはぬ他の
うへをうへとしていつの袖ふるそあきをぬぎつるをいとはぬのごれ
ハまりふりのとそあるべきをぬぎ今の世の人ハ春の

9112
1
06